

## 2021.2.20.市主催の第1回ワークショップに参加した人たちの中から9人の意見、感想

●皆さん結構盛り上がって、図書館の夢を語り合い、こんなこともしたい、あんなこともできる…とアイデアを出しましたが、いちばん肝心の公立図書館として維持するのかどうかということがあいまいなままの議論なのです。係長は絶対に代替施設を残すと力説しましたが、市がどこまでどうかかわるかという事は一切触れずに、みんなで考えましようというのですから、以前の詐欺的ワークショップとあんまり変わらない感じでした。

私はどのセッションでも「公立」の図書館として残すという前提の上で市民参加のアイデアを出しますと、しつこく言って取り組みましたし、最後に各グループから短くコメントを言う機会があった時にもそう言いました。別のグループのまとめ役は図書館を公共施設として維持することの重要性を理路整然と述べられ、別のまとめ役は、グループの中で司書の存在の大切さを実感している人の例を挙げ、子ども図書館的な方向も紹介されました。「浪江虔の理念が大切」を訴える人もいました。

しかし、多くの参加者は公立から外れるということの重大さに気づかぬまま（気づかれないように進められている）すてきな図書館づくりで盛り上がっちゃった感じです。

たくさんラベルが書かれましたが、あれを一体どう処理するつもりでしょうか。主催者に都合のいいのだけつまみ食いするのだと思います。

ファシリテーターのK氏が次回の予告をしましたが、何をするのか不分明なので、どういうテーマでどう進めるのか、事前に参加者に知らせるよう要求しておきました。今回だって行くまで内容はわからず、主催者側の資料は紙一枚ないのです。ペテンというほかありません。

私の考えでは、市民との協働を図るなら、市側の計画の骨子—どんな機能の図書館（もどき）を作ろうとするのか、行政上の位置づけ、予算、施設と人員配置を明示したうえで、市民側のアイデアや参画について議論すべきだと思います。「鶴川図書館は公立図書館としては廃止する、その代わりに施設は維持して、予算いくらで人は何人付ける、市民主導でどんなことができるだろうか」・・・こういう問題の出し方なら議論としては明確になります。ワークショップとはそういうものです。

次回、主催者から内容がきちんと示されないなら、あんなお祭り集会にはもう行く気はありません。意見書を出して抜けます。

●あまり実り多かったとは言えませんが、私たちの会が主催するときには来ない、図書館に対してそれほど熱くない人とか、別の分野で鶴川地域で活動している人も参加しているという点で、意味があったかと思います。そして、なんと高校生が1人参加していました！

また、最初は、公ができないことを市民ができるのではと思っていたような人も、各テーブルに核になる人がいたおかげで、図書館というものは、やはり公が管理し、市民が協力して不足の部分を補うというスタンスをわかってくださったように感じました。

3番目の話し合いでは、私たちのグループでも、最初公的な施設ができることと市民団体ができることがあるという話が出て、公立でないといけないことは何かと訊かれて、図書館同士のネットワーク、継続性とリファレンスができる司書の存在などを伝えましたら、一人の方が、私立校に通っている娘さんが学校図書館の司書の方にとっても助けられた、思春期の精神的な部分でも寄り添ってもらえ、調べ学習などの力が付いたことなどを話し、ほかの二人の方も公立図書館でなくてはできないことを納得してくれま

した。そして、鶴川図書館では児童書が充実している、学校や幼稚園保育園に近いことなどから、子ども図書館的な特徴をもっと伸ばし、アピールすることで、新しい住民も呼び、周りからも人がやってくるような図書館にしたいということを報告しました。

●数年前にこちらに転居したのは、娘には図書がしっかりある学校の環境で育てたいと、図書数が一番を誇る学校に魅力を感じてのことです。多感な時期に寄り添い選書してくれたり、学ぶ意欲を育む調べ学習の面白さを身につけていただき、人として自律した成長が育めたと思っています。図書室、図書館は人生において学ぶ、生きる面白さが培える大切な場所であると。ですので、回覧板で鶴川図書館の存続運動を知った際には、残念でしたし、私だけ、わが家だけがよかったではなく、この機会に図書館の意義をもっと知ってもらいたいと思って参加しました。

ワークショップの感想としては、

そもそもあのワークショップをきちんと知らせてない（コロナ禍で回覧板がなくなりました）のと、ワークショップということで集めて、市民に運営をしてください。何ができますか？という流れが、とても悲しかったです。お金がないんだから、利用者が少ないんだからと、理由をつけてますが、そもそも図書館は基本的人権にそった公的なものであり、その魅力を市民に広げるのが行政の仕事ではないでしょうか。市民のために働くのが、公務員ではないでしょうか。

昨今、格差社会、子どもの貧困、DV、不登校、子どもをとりまく状況は悪化しています。身体的健康では、OECD1位なのに、自己肯定感、幸福度調査では下から2番目という低さです。このような状況下で、鶴川図書館の存続云々というのは、どうなのでしょうかとと思います。

●ワークショップの進め方には、だいぶ違和感を持ちました。その内容は、次の通りです。

1 一つ目のワークショップで図書館に望むものを何でも挙げて欲しいと言われ、鶴川図書館に限らず、また実現する、しないにかかわらず、夢のようなことでもいいとのことでしたが、これは明らかに市民が求める図書館像という形で利用されるのだと感じました。版画美術館の改変に関してもワークショップが実施されたそうなのですが、その時は芹が谷公園を見て回ったりして、参加者に利用方法についてのアイデアを募り、それを利用して、版画美術館を美術とは無縁の集いの場所のような性格の場所に変えようとしたという経緯を聞いたことがあります。それに似た下心を感じました。

今回のワークショップでも、参加者は市のそんな下心は知らず、喫茶スペースが欲しいとか、ゆっくり寝る場所が欲しいとか、半分冗談のような「夢」をカードに書いていましたが、それが鶴川図書館の今後利用されるのではないかと危惧を持ちました。

2 二つ目のワークショップは、そもそも再編後の図書館の持つべき、図書館機能以外のコミュニティ機能についてのアイデアを出して欲しいということでしたが、それ自体おかしなことだとも思いました。中央図書館のようなスペースに余裕のある館ならいざ知らず、鶴川図書館の場合、図書館の機能を果たすだけでも一杯一杯で、そもそもそれ以外の機能など果たしようもないはずですが。また、もしもそれ以外の機能を果たす場所が欲しいというなら、場所柄、太陽の広場には歓談スペースもあり、喫茶店もすぐ側にあるので、何も図書館にそのような機能を持たせる必要はないはずですが。ここでも、ある方向に誘導しようとの思いが透けて見えました。

3 三つ目のワークショップは公共図書館化を前提に、市民にどういう働きができるかを考えさせるも

のですが、そもそも公共図書館にした場合のプラス・マイナスについて十分な評価が示されないままに公共図書館化を前提とした話し合いなどおおよそ無理だと感じました。そこで私は、参加したグループで、まず公立でなくなった場合に生じる機能の低下について話しました。幸いそのグループの参加者の多くは皆図書館を外部委託することについて批判的な考えをお持ちの方でしたので、文化的な活動に予算を惜しむ市の姿に批判的で、小学校の統廃合なども含めて話が弾みました。それはそれで良かったのですが、ワークショップの持ち方として、はなはだ公平でないものを感じましたし、図書館自体をどうするのかという方針を示さないでにおいて、市民にできることを考えさせるというのは、順序が全くの逆だと思いました。

●あつという間の展開だったので、何が何だか、話さなきゃ、まとめなきゃ、でした。何が目的のワークショップなのか、仲間作りなのか、はたまた、実績作り、アライバイ作りなのか。少なくとも、具体的に今ある図書館の価値を検証し、どう改善するか、という作る動きとの関連性は、腑に落ちない感じでした。まず、浪江虔さんに言及したこと、は、残しておきたいですね、ただ、だから、どうなのか、ということは議論されなかった。そういう意識の中で、繰り広げられる意見、希望、欲求というのは、果たして、議論として相応しいのか。たしかに、公共、なので、多様な意見が必要だと思いますが、ここまで、いわゆる、公共が形骸化している今、それを立て直すための知財庫であり、新しく潤滑油のような機能を持たせようとするなら、芯の部分は、あーだこーだ、を、ここそこ、とまとめて、報告書にして、参考にしました、とされても、骨抜き地蔵に油を注ぐようなもの、かえって、ばちがあたるというものです。地域の、時代に即した市民の学びの場作りとして、浪江虔の価値があるのであれば、今の時代の、それは何か、全国どこかに参考となる公共図書館はないのか、具体的なものを提示して欲しかったと思う。何はともあれ、市民参加のワークショップが、あまりにも進め方だけが一人歩きし、そもそも、なんのためにやるのか、一番大事なことは何か、わからないまま、空転している状況含め、危機的だと感じました。結局、みんな好き勝手言っただけの会で、なんら方向性も見えず、終わったあと、疲労感が抜けていくにつれ、絶望感が押し寄せました

●予想されたように、鶴川図書館再編が大前提の進行だったので、私は言いたいことがほとんど言えずに終わりました。ただ最後の各グループから発表では、文化予算自体を減らすことがおかしいこと、公的な土台があって市民が力を出せることなどが話されたのでよかったと思いました。それと私は、三密が気になりました。主催者はどう考えているのでしょうか。最初30人限定と聞いていたので、会議室の大きさからいって隣どうしの距離は保てると思って参加したのですが、当日はその2倍近くの人が入っていました。応募者のほかに図書館側が動員した人たちが加わったせいがないかと思いました。

●全体として、非常に意義深いものだったと感じました。

まず、町田市中央図書館の中川氏が鶴川図書館について「市は何らかの形で存続させたい意向である」と明言されたことは、地域住民にとって希望が持てるものであると思います。

いかなる形で存続させるかが次の課題となりました。

次に、清原氏の講義は非常に論理的かつ情報が満載でした。

日本の人口減少と経済の衰退を背景に、官による社会資源の再分配を期待するのは困難な時代となり、公共の一要素としてNPOなどの市民セクターが鶴川図書館を担うべきであるとのこと指摘は、同図書館の運営主体を考える上で示唆に富むものでした。

しかし、スクリーンに映し出されたスライドの文字が小さすぎて、肉眼で読み取ることが困難でした。資料配布していただければ、内容を聞きながら手もとで確認できます。

そして、グループに分かれて、①「こんな図書館がいいな」、②「地域コミュニティでこんなことができるといいな」をテーマに、参加者各自が意見を大型付箋に書いて模造紙で貼り付けたことは、次世代の鶴川図書館の機能や可能性を多角的に考え、思考を視覚化する良い手法だと思いました。自分では考えもしなかった図書館利用法が多く提起されました。(仕事のために、4時過ぎに退席)

●私は図書館大好きの会以外に話し合いに参加した事がなかったので、皆様のご意見を伺いたいとの思いで参加したのですが、有意義な話し合いができていたと思います。

☆レクチャーの内容は、わかりやすくポイントを押さえて話されていて、初心者にもよく分かりました  
☆グループの意見交換は活発に行われていて、課題も話しやすいテーマで良かったのですが、自己紹介や同じグループでの話し合いの時間が短かったと思いました。

☆ワークショップの進め方は、少々急ぎ足だったように感じました。

1回目はそもそも図書館とは！を全員で共有して2回目に鶴川図書館の今後を、運営から内容検討などに特化して交流し合うのかなとも思いますが、図書館を考える大事な時間が持てる事に感謝したいです。

●再編後の姿を考える、という夢や希望を語り合うのは楽しいので良かったのですが、参加するまでは目的が分かっていませんでした。結局は、地域で活動したい人たちの拠点とプラスαとしての図書館の機能をもったハコモノを作って、その運営を市民団体がどこかに任せよう、という方針だということでしょうか。まず幅広く市民を参加させるのであれば、図書館とは何かというところを専門的に学ぶ必要があると思いました。司会者の方には申し訳ないですが、あのレクチャーでは物足りないです。

・市の職員も一緒に話し合いに参加するなら身分を明らかにしてほしいし、資料も用意してほしいです。曖昧な根拠をもとに言いたい放題でした。私は以前の学習会に参加した知識があったので良かったのですが。こんなワークショップよりも図書館を魅力ある場所にしてもらいたいと願う市民や子どもの声をきちんと聞く機会を作ってもらいたいです。

次回は参加者の中にいらした高校生の方の思いをもっと聞いてみたいので参加しますが、2時間もあの狭い空間に閉じ込められるのは嫌です。あんなに人数がいるのなら、場所をホールに移動してほしいです。

・ちなみに最後のテーマでは4班でしたが、UR職員と市の職員が入った6名テーブルで、さて、市民で運営してくださいということはNPOですね、事務局が必要ですね、何かできますか？と問われましたが、本がたくさんある図書館をもっと増やしてほしいと願っている娘の代弁者として、「利用する人が減ったという理由で市立図書館を存続できないという理屈は納得できないし、そもそも市がきちんと運営してくれたらこんなことは考えないで済むのではないか」と発言しました。

「そうは言っても稼働率7割減なので。市に存続してほしいというのであれば、もっと100万とか？税金払ってもらえますか？」という趣旨のことを市の職員に言われました。一言一句正確ではありません

んが、「100万～」というのは耳に焼き付いています。馬鹿にされているのだと感じたので、もっと払っているのに納得できないし、ポップホールができたから利用者が減ったのですよね？という事実を確認しました。新聞に載るような目立つことをすれば予算を多くつけてくれるかも、という同じ職員から発言があったのですが、予算を減らして図書館の魅力を下げてきたのは市なのに、なぜ市民が「稼げる図書館」の運営の仕方などを考えなくてはいけないのでしょうか。最後の班では大変腹が立ちました。

注：手元に届いた順の掲載